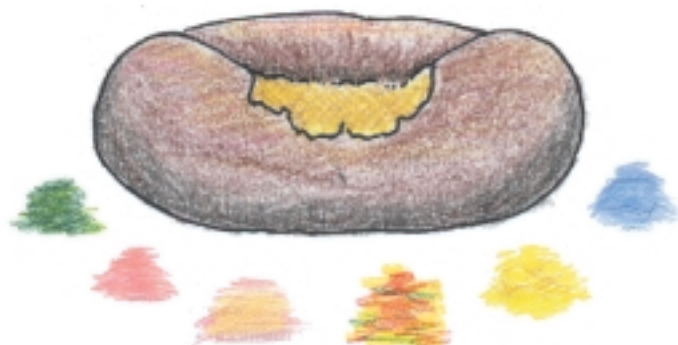


魔男耕太郎

色使いの魔法使い



Madan Koutarou

Bunroku's Factory

魔男耕太郎

3

色使いの魔法使い

ぶんろく

Bunroku's Factory

街の人間から檜の木屋敷と呼ばれる坂の上の家。その名の由来である庭の檜の程にツリーハウスが黒い影を作っている。

街を見下ろし、気分の良いツリーハウス。子どもたちの格好の秘密基地も、冬はひっそりとしている。ドングリも戦争ごっこであらかた使い果たしてしまったし、隙間だらけのツリーハウスは寒いのが難点だった。

春になり、毎年繰り上げられる秘密基地の争奪戦で子どもたちが集うまで、巨大な巣箱は寂しく過ごす。

そのツリーハウスのテラスに檜の木屋敷の主、魔男耕太郎が立っていたが、街の人間からは見えるはずもない。葉の色もくすんでいる檜の木は街からはどんよりとした冬の空に溶けるように見えるだけだし、寒さでみんなうつむいて歩いているから、檜の木屋敷のことなど見上げることもない。

魔男は冬の空の下で埃っぽく見える街を見つめ、坂道を登ってくる郵便配達を待っていた。

魔男耕太郎は、魔法使いを自認している。おまんまの糧は魔法なのだが、冬は魔法使いには受難の季節だった。高い報酬を取るわけではないのだが、寒さが人の心までカチコチに凍らせるついでに財布の紐も固くなってしまいうようだ。だから、いつも冬は腹ぺこだった。

営業に出るわけにも行かず、こうして毎日、坂を登ってくる郵便配達を待っている。

街の人間でただ一人、櫛の木屋敷を憎んでいる郵便配達も、この季節はバイクさえも入ることができない坂道を登らなくてすむので、喜んでいるに違いない。「耕太郎、寒いから部屋にもどろ」

耕太郎の肩に座っていた妖精の光子が言った。光子の小さなくしゃみが耕太郎のもみ上げを揺らした。

魔男はツリーハウスから地面に下りると、「ドーナツ荘」というれっきとした名前を持つ櫛の木屋敷の部屋に帰った。

冷蔵庫には二週間前の仕事の謝礼のドーナツの残りが五個と牛乳しかなかった。大好きなコーヒーもない。魔男は牛乳を一口飲んで顔をしかめ、ドーナツを半分に切って口に放りこんだ。二、三日のうちに仕事がないと、飢え死にしそうだ。仕事きたら、報酬を前払いで貰おうかとまで思いつめていた。

「耕太郎、なんだったら、アタイが街に働きにどうか」

光子が言った。

「こないだ街に行ったときに『ねえねえおねーサン、うちの店で働かない？ おねーサンならあつという間にナンバーワンになって、稼げるよ』って声かけられたんだ」

光子は小さな名刺を魔男に見せた。

「クラブ エンジェルヘア マネージャー 陣内三郎」

魔男は光子を見た。光子は妖精姿から人間の女に変身している。好きな姿に変身できるのだから美しいに決まっているが、卵形の形の良い顔に、切れ長の目、

ほっくりと白い頬、ぷっくりとした淡いピンク色の唇、鼻筋は丸みを帯びて高からず低からず。小鼻が張っているのが、おきゃんな妖精の面影をとどめている。今日はきはだ色の着物の襟から白い襦袢がのぞく「氷がさね」の着物を召している。サーモンピンクの帯と石榴色の帯締めがうっすらとした印象に鮮やかなアキュセントを加えている。肌が白いからさながら冬の妖精といった風情だ。たしかに美しいからナンバーワンになれるだろうが。

「光子、おまえ酒は飲めるのか？」

「だめだ。あれは悪魔の飲み物だ。飲んだら妖精でいられなくなる」

「丁寧な口調で話すことができるか？」

「たとえば？」

「頭髮の薄くなった男はなんという」

「はげおやじ」

「……」

「どうした、耕太郎。アタイなんか変なことを言ったか」

魔男は答えず、光子にできる人間の仕事はなんだろうかとしばらく考えたが、なにも思い浮かばなかった。

「まおとこさーん。いますかあ?」

窓から隙間風と一緒に部屋に入ってきた声に魔男はベッドから跳ね起き、部屋から飛び出した。

郵便配達はいつもは何度声をかけても出てこない男が一声で出てきたので驚いた。

「まおとこさん、郵便です」

普段であれば、「まおとこまおとこ」と連呼する郵便配達に剣突をくらわせる魔男だったが、今日はにこりと微笑むと「配達ご苦労さん。冷たいものでも飲んでいくかね。そうかね仕事が忙しいか。それは残念。また来てくれたまえ」とい

うと、アパートにさっさと入っていった。

郵便配達は、いつもなら、魔男と遭り合っているうちに、息を整えて坂を下って行くのだが、今日はそんな暇もない。あっけに取られて帰っていった。

坂を吹き登る風に汗を掻いた身体が冷えたのだろう、郵便配達の大きなくしやみを遠くに聞、小声で「ドーナツドーナツ。仕事だ仕事」とつぶやきながら、魔男は封を切った。

「どうだ？ 簡単そうな仕事か？」

光子が聞いた。

魔男は手紙を丸めてゴミ箱に捨てた。

「なんだ仕事じゃなくて、借金取りか？」

「いや、仕事だ」

「じゃ、なんで捨てる。このままじゃ飢えるぞ」

光子はゴミ箱から手紙を拾い上げるとテーブルの上で皺を丁寧に伸ばした。

「なんて書いてある」

読めないなら拾うな、と魔男は思ったが、「人を殺してくれと書いてある」と言った。

「耕太郎の魔法じゃ人は殺せないのか？ 簡単だろう？」

妖精の癖に光子は「らしくない」ことを平気で口にする。

「人殺しが簡単とか魔法ではできないとか、そういう問題じゃない」

「じゃ、なんだ？ あ、血を見ると気を失うのか？ だいたい、耕太郎の魔法をかけに行くのはいつもアタイだ。耕太郎はこの部屋でドーナツ食ってるだけだ。なにも怖いことはないだろう」

「怖いとかじゃなくて、やりたくない、ただそれだけだ」

「やらなきゃ、おまえが死ぬんだぞ」

「その時はその時だ」

「ばーか。なに格好つけてんだ。貧して鈍したか耕太郎!! 人が殺されたと思わせる魔法ぐらいないのか? なけりゃ、いまから考えろ!! このうすらトンカチ」

∞

魔男さんは光子の鉄火口調に口をあんぐりさせています。

——あ、失礼。私、魔男さんの部屋の居候、ネズミの文蔵です。ちよくちよく顔を出しますのでお見知り置きください。一宿一飯の恩義で魔男サンの秘書を任じております。

さて、魔男さん、お仕事がなくてお困りのご様子ですな。仕事がないと私もおこばれに預かれないので困ります。なんとかしていただきたいもんです。

魔男さんは魔法使いです。どんな魔法を使うかは、お話をお読みいただければご理解いただけると思いますので、ここでは、簡単に魔男さんのことを紹介しておきましょう。

えー、魔男耕太郎——郵便配達は「まおとこ」と呼んでいましたが、正確には「まだんこうたろう」というのが通り名。

なぜ、魔男（まだん）なのか。魔女と言う言葉があるのに、男だと「魔法使い」と十把一絡で言われることが許せない、と以前言っていたことがあります。

ちなみに「まおとこ」と読み間違えられるのもビミョウに自尊心を傷つけられている節があります。ましてや、手紙の表書きに「間男」と書かれていたりすると、即座に破り捨てますから、仕事を依頼するお手紙をだされる際はくれぐれもご注意ください。

とにかく、特に思想信条あって「魔男」と名乗っているわけではなく、そうとでも名乗らないと、魔法使いにまったくいいほどみえないというのが本当のところだと思います。

年の頃は四〇、髪にちらほらと白いものが混じる歳頃です。中肉中背、牛乳ビンの底のような厚いレンズのメガネをかけておりますが、それ以外、とくに特徴

のある顔たちではありません。ようするに目立たない、はっきりいって印象の薄いお人です。同窓会でも、担任の先生にも最後まで思い出して貰えないタイプです。

助手に妖精の光子がいます。彼女(?)はここまでのお話でおわかりのように、大変美しいのですが、かなり、蓮っ葉というか、妖精らしからぬ言動をいたします。

ようするに魔法使い「らしくない」男とおよそ妖精「らしくない」光子のコンビが活躍するお話です。

さて――。

しばらく光子をまじまじと見つめていた魔男はベッドから起きあがり、光子に近づいた。

「な、なんだよ。怒ったのかい？ ま、まさか、叩くんじゃないだろうね。叩い

たら出て行くよ。あんたみたいな風采の上がない魔法使いの助手をやるうなんて心映えの良い妖精なんてアタイぐらいなんだから!!」

強気な発言とは裏腹に、光子は椅子の上で逃げ場を失いのけぞっている。魔男はおかまいなく顔を光子に近づける。

「今日の光子は一段と綺麗に見える。知性が表面的な美しさに磨きをかけている」

魔男は光子の後ろの本棚から魔法の虎の巻「魔男ノート」を手にとると熱心にメモを取りはじめた。

光子は鏡をのぞきこんであっち向いたりこっち向いたりしながら、ニヤツイテいる。

冬の弱くて短い陽射しが翳り、寒さが部屋に入りこむ時分になって、ようやく、魔男はノートを閉じた。

「さ、光子。仕事だ。これを揃えて来い」

魔法の処方箋と書かれた紙を光子にさしだした。

「えー、いまからかい。もう夜だよ。寒いし。明日じゃダメなのか？」

「安い早い効くが私の魔法の特徴だ」

「調子に乗るな耕太郎。おまえの窮地を救ったのはアタイだろ!？」

「そうだ。感謝している。この通りだ」

魔男は光子に深深と頭を下げた。

「じゃ、明日でも良いんだね？」

「だめだ。ドーナツが切れそうなんだ。耐えられない」

「金がないわけじゃないんだから、買ってきなよ」

「だめだ。買ってきたものでは、滋養にならない。感謝の念がこもったものではないと」

光子は仕方なく街へでかけていった。助手としては自分の担当している魔法使い

の業績が悪ければ、妖精界に連れ戻されて再教育される。それにより、綺麗な服を着ることができいまの暮らしを捨てる気にはなれなかった。

坂道を下りながら魔男に渡されたメモを眺める。

「ドーナツ。ま、これは言われなくてもわかる。商売道具だからね。水仙、百合（ピンク）、シクラメンかあ。今回はなかなか見栄えの良いドレスができそうだ。それからジャコバサボテン？ ま、ちょっとしたあしらいには面白いかもしれないね。花はちょっと毒々しくてアタイの好みじゃないけど。で、ハゲイトウね。最後にワスレナグサか。あの浅いブルーは好みだよ。うんうん。今回は心配の種は何もないね。それに全部花屋でそうなのが嬉しい。この寒い中、あちこち行くのは骨が折れるからね」

えーネズミの文蔵です。妖精の光子が買い物をしている間、お邪魔します。

なぜ光子が、魔男さんから言いつけられた買い物の中身を気にしているかと言

いますと、魔男さんが使う魔法と関係するのです。

魔男さんは、光や色のエネルギーを集めて利用します。そのエネルギーは一旦光子の身体に集められるのですが、それは、光子のドレスとして出現するのです。だから、買い物の中に汚い色のものや得体の知れないものがあると光子は酷く機嫌が悪くなります。

さて――。

「ただいまあー」

機嫌の良い声とともに大きな花束が魔男の部屋に入ってきた。薄暗い部屋が明るくなった。

「耕太郎、こんなに綺麗な花で、人を殺せるのか!？」

「まあ」

「なんだか今回はやる気が出てきたぞオ!!」

「それじゃ早くでかけろ」

「どこへ！」

「依頼者を連れてくるのに決まっているだろうが」

「これからか？」

魔男は答えずに窓を指差した。光子は舌うちを小さくすると妖精の姿に戻り、窓ガラスをぬけて北風が吹き始めた街に出ていった。

魔男は光子の買ってきた草花をテーブルの上に並べると花や葉をむしり始めた。しばらくすると色別にわけられた小さな山がいくつもできた。最後に、真ん中にドーナツを置く。

テーブルから一步下がってテーブル上の景色を眺め、出来映えに満足すると、魔男は着替え始めた。

えー、文蔵です。ちよくちよくお邪魔します。魔男さんは自分じゃ説明しないと

おもうので私がもうしあげます。

魔法使いとしての魔男さんの制服というか仕事着は白タイツに虹色マントです。どうか笑わないでやってください。

さて――。

魔男はマントを肩にかけると、部屋の入り口に立った。お客さんを迎えるしきたりだ。

「ぶぶぶぶー。寒い!!」

真夜中過ぎになって、ようやく妖精の光子が帰って来た。寒さのせいで、いつもは半透明の桃色をしている身体も霜が降りたように白くなっている。鼻も赤いし、鼻水も出ている。

「来たか？」

「ああ、見つけるの苦労した。人殺しを依頼してくるくせに、押し入れになんか

隠れていやがった。肝の小さい奴だ」

ドアがノックされた。魔男は「どうぞ」と声をかけると右の人差し指をちよつと動かしてドアを開けた。

「あの、まあとこさんの事務所はこちらですか」

魔男はドアを閉めようかと思ったが、冷蔵庫をドーナツで満たすためにはしかない。我慢した。

「井上源太郎さんですな。お待ちしておりました」

井上はびくびくと魔男の部屋の中を見渡した。あまりにもびくびくしていたため、魔法使いを名乗る男の奇態にも気がつかなかった。

一時間ほど前、突然耳元で「櫛の木屋敷へいくんだ」という声が聞こえた。回りは誰もいない。いなくて当然、押し入れの中に隠れているのだから。首を巡らせてもかび臭い布団があるだけだ。

「さっさとここをでて、ドーナツを買ったら櫛の木屋敷にいくんだよ」

再び有無を言わさぬ声が聞こえた。自分が檜の木屋敷に住んでいる「まあとこ」という魔法使いに手紙を書いたことはもちろん覚えていたが、どうして手土産がドーナツなのか、そしてなぜ自分が行ったこともない檜の木屋敷への坂道の狭い入り口を迷わず探し出せたのかわからなかった。だが、自分の意思とは関係ない、逆らえない力に引つ張られているような気がした。

ドーナツ荘とかかれた門にためらわず入り、魔男耕太郎と書かれたドアの前に立った。

ドアの向こうに白タイツ姿に虹色マントの男を見た時、なぜだか「これで助かる」と思い、膝から力が抜けてしまった。

「大丈夫ですか井上さん」

ドアの前で急にへたり込んでしまった男に魔男は声をかけたが、手を差し伸べることはなかった。

「大丈夫です。すみません」

男はよろよろと部屋に入ってきた。

「そこへおかけください。約束のものは？」

「よくわからないので、適当に買ってきてしまいました。これでよろしいでしょうか」

男はドーナツを差し出した。魔男はうなづいた。

「さて、まずお聞きますが、あなたは魔法を信じますか？ 魔法使いが本当にこの世に存在するとお考えですか」

「あのー、水をください。のどが乾いて、声が出ないんです」

魔男は、自分の質問をさえぎった男の物言いにむっとしたが、何も入っていないコップをテーブルの上に置くと、「どうぞ」といった。

男がコップを手にする底からと水が湧きあがった。

「早くしないとあふれますよ」

男は水を飲み干したコップの底をのぞきこんでいるが、水はもう出てこなかった。

た。自分が飲んだのが本当に水なのか自信がなかったが、のどの乾きが和らいだの事実だ。

「魔法を信じます。だって、三丁目の善吉さんがなくした金縁の老眼鏡をみつけたのはまあとこさんだって聞いたし、四丁目の伊兵衛さんのいなくなった猫のムサシを見つけたのもまあとこさんだと聞いてます。それに、九丁目の凡太さんの――」

「もういい!!」

魔男にきつく言われて男はビクツとした。

「なんだか、この男の言うことを聞いていると耕太郎は魔法使いと言うよりは便利屋だな」

魔男の肩に腰掛けている妖精の光子が茶化した。

男は、押し入れの中で聞いた声が聞こえたような気がして周りを見まわしたが、目の前で魔男が独り言をブツブツ言っているのをびくびくとしながら見守つ

た。

∞

え、またまたお邪魔します。ネズミの文蔵です。今回の依頼人ですが、魔男さんの説明ではちょっと不足していますので、付け加えましょう。

男の名前は井上源太郎、三〇半ばくらいでしょうか。二〇代後半からギャング、それもたちの悪いゲーム賭博に嵌まってしまいました。ご想像の通り、借金で首が回らなくなり、逃げ回っておりましたところ、借金取りが人を殺してくれれば、借金を棒引きにしてくれると言うのです。なんの考えもなしに、二つ返事で「やります」と答えてしまったんですな。バカなお人です。ま、バカだから故なんでしょうが。

簡単に思えた人殺しですが、いざとなると怖くてできない。車で跳ねようにも運転はできないし、銃を撃てないのはもちろんですが、包丁は中学校の蛙の解剖以来、トラウマとなって握れません。料理はせずにコンビニの惣菜や外食ですま

せてきました。火をつけようにも相手はマンションに住んでいるためほかの人を巻き添えにします。

のばしのばしにしているうちに「まだかまだか」の催促です。「殺すまで、おまえの借金は増え続ける」と脅される始末です。そんなわけで、一日のほとんどを押し入れの中で暮らしているんですな。

その時思い出したのが、子供のころに聞いた檜の木屋敷の魔男さんのことというわけです。

ちなみに男が言いかけた九丁目の凡太さんの件は、彼が可愛がっていた文鳥のぴーちゃんを見つけたというものでした。

基本的に魔男さんは依頼を断りません。それは、駆け出し時代から変わりません。えらいお人です。そのため、新人の頃の仕事は便利屋といわれてもしかたがないようなものでした。

さて――。

「それでは、これを」

男は魔男がテーブルから取り上げ、さしだしたドーナツを受け取ると、なんのためらいもなく口にくわえた。

「ばか!! 食べるんじゃない。だれが食べて良いといった」

男は飛びあがらんばかりに驚いてドーナツを口から吐き出した。齧りあとがついたドーナツを手にして恐る恐る魔男を見る。

「すみません。これ、くつつけますから」

男は齧ってしまったドーナツを口から出すと、懸命に齧りあとにはめ込んでいく。

「こら、汚いことをするんじゃない。食べてしまったものはしかたがない」

魔男は、だからこの仕事は気が進まなかったんだと、光子に煽られた自分を後悔していた。

「両手で持って胸の前に差し出しなさい。魔法を信じ、魔法の力が欲しいのなら、何が起こっても動いてはいけません。いいですか？」

男は首が外れるのではないかと思うほどなづいた。

「光子、さあドーナツの穴の下に」

光子は今日のドレスは期待できそうだと思っていたから、いそいそとドーナツの下に立った。

魔男はドーナツの下に何かを置いたらしいが男には見えなかった。しかし、それを口に出来るほど男に余裕はなかった。

魔男はテーブルの花や葉の山からハゲイトウを選ぶと、ドーナツの穴に通した。

何が起こるのかじっと見ていた男の前でハゲイトウはドーナツの穴の中に消えた。

えー、もうこれで終わりにします。ネズミの文蔵です。チヨイの間だけ失礼します。

魔男さんのお使いになる魔法は、最前申しあげましたように、「色使い」の魔法と申しまして、色、光のエネルギーを集めて利用するというものです。

魔男さんがかつて妖精の光子にした説明では、「光は粒子、つまりは物質。物質を集めてそのエネルギーを使うのだから、サイエンスなのだ!! まじないの類いではない!!」というものでした。どうです? お信じになりますか?

エネルギーを集める際に使うのが、ドーナツです。

どうして光のエネルギーを集める道具がドーナツなのかというと、魔男さんがドーナツ好きだから!! ということもあるんですが、魔男さんによれば「ドーナツの穴は、そこに何もないわけじゃない。ドーナツがあつてはじめて存在する穴、逆もまた真であり、穴があつてドーナツが存在する。穴は確かに存在する空間なのだ。ドーナツを食べると言うことは、その空間も食すということ。何もな

いところに空間を作り出すドーナツこそ、光の持つエネルギーを顕在化させるにふさわしい道具なのだ」というらしいですな。

集めた光をドーナツの穴に通す。通すことで光のエネルギーが目に見える物体——この場合つまり光子のことです——になって、それを使って人に影響を与えるのだというのが、魔男さんの説明です。

もっと詳しく知りたいと思う方は、ドーナツを手土産に檜の木屋敷までどうぞ。ただし、これまでおいでになった方はいませんな。

さて——。

「さ、これで魔法は終わりです」

男よりも光子があっけに取られている。テーブルには、まだ色彩彩の花びらが残っているからだ。ハゲイトウのエネルギーを集めたドレスも華やかだが、季節はずれのムームーのようにも見えていまひとつ感心しない。

「終わりですか。これでぼくは人を殺さなくてもすむですね」

「勘違いしないでください。人を殺すのはあなたですよ。わたしじゃない」

「それじゃ話が違う!!」

「どう違うのですか？ あなたは人を殺して欲しいとだけ依頼してきた。私は魔法使いで人殺しではない」

「それじゃ、魔法ってなんだったんですか」

「あなたが人殺しになれるようにしてあげたんです。それがお望みではなかったのですか？ 自分には人殺しができない。何とかして欲しいと言うわけでしょう。自分にできないことを人に押し付けるのはよくないことではありませんか？ それじゃ、あなたに人殺しをさせようとした人間と同じです。ご納得いただけないのなら、このままお帰りいただいて結構ですよ、私は困りませんから」

「そ、そんなあ」

男は頭を抱えている。

「どうですか、こんなことを言う私を殺してやりたいと気分にはなっていませんか？」

男は、はっと顔を上げ、自分の心のうちを探ってうたが、やがて力なく首を振った。

「さ、そのドーナツを持ってお帰りなさい。もし、多少なりとも魔法を信じるのであれば、そのドーナツをあなたが殺さなければならい人の家の前に置いて帰りなさい。そうすれば魔法は完成です」

光子は魔男が言わんとすることに気がついて、ドーナツに飛びついた。この男には、光子の姿が見えないのだ。時折あることだが、今回のような深刻な依頼のときにはいままでなかったことだ。光子の姿が見えない依頼人の願いは叶わないことが多い。叶っても本人の希望通りとはいかないこともある。だが、それは魔男や光子の責任ではない。

男は光子とは別の意味に魔男の言葉を受け取った。何か言えばまた「バカ」と

言われるだけだろうから、無言で頭を下げ、魔男が袋に入れてくれたドーナツを持ち、ドーナツ荘を出た。

草木も眠る丑三刻というのがそれは嘘だ。人間が惰眠をむさぼっているこの時間こそ、森羅万象の時間だ。風の鳴る音、木々のざわめき、石礫が擦れる音、落ち葉の上を歩く昆虫の足音……。そんな賑やかな夜の音に耳を貸す暇もなく男は坂を街へ下っていく。人を殺しに行くという緊張感は微塵もない。缶蹴りの鬼をずっとやっていた子どもが母親の「ご飯だよ!」という呼び声に助けられて家に帰るような足取りだった。責任を逃れた清々しが滲んでいた。坂道でなければスキップしただろう。

「ふうー。これで助かる。なんだかんだといいながら、あの魔法使いも良い所あるじゃないか。ようするにこのドーナツに魔法がかかっていて、これを食べると死ぬんだ。白雪姫のリングと同じだ。だから、ぼくがドーナツを齧ったときあんなに怒ったんだ……」

男は街への坂道を歩きながらブツブツと言っている。

「こいつほんとうにバカだ」

男は手にしたドーナツの入った袋から声が聞こえたような気がしたので中のぞいてみたが、自分の齧り後が暗闇に白く見えるだけだった。

「でも、齧っちゃってマズったかな。ただでさえ家の前に置かれたドーナツなんて拾い食いする奴なんていないだろうし。おまけに齧り痕もあるし……。ただ、あの魔法使いが悪いんだ。何も言わないでドーナツを差し出すから」

男は自分の軽率さを後悔するまえに、魔男をなじった。

「魔法使いが責任とってくれるさ。それに人に殺されるような奴はマヌケに決まっている」

男は自分が殺すはずの人間が住むマンションの前に来ると急にびくびくとし始め、早起きの鴉が鳴いただけで電柱の影に隠れた。そんな自分が怪しい奴だとは夢にも思っていない。

ドーナツの入った袋をマンションの入り口に置くと、大きな足音をたてて逃げ帰った。

男の足音が消えると光子は大急ぎで袋から出た。のんびりして新聞配達に踏み潰されてはかなわない。

「やれやれ。気の重い仕事だよ。そりゃ耕太郎だって善人と言うわけじゃないけど。今回ばかりはね。まったく気分合わないドレスだよ。それに季節はずれだし」

光子はブツブツといいながらマンションを見やると、宙に舞いあがった。

そのころ魔男は男の持ってきたドーナツをゴミ箱に捨てると、部屋を出て、櫛の木のツリーハウスに登った。テラスから、目覚めはじめた街が見える。短い夜を惜しむように木々は別れの言葉を交わし、生き物たちは今宵再びの邂逅を約している。

魔男が目凝らすと、まだ消えていない街灯の上を光子が飛んでいるのが見え

た。魔男は手にしたドーナツを口に放りこむと光子の軌跡を追った。冷蔵庫の中で固くなり始めたドーナツは冷蔵庫の臭いがしてひどく不味かった。

光子は古びたアパートの部屋を見上げた。光子が着いて間もなく部屋に明かりがついたところを見ると、今帰って来たのだろう。

「さてと」

光子は宙に舞い上がり、窓ガラスから部屋に入った。じやまになるカーテンがないのは確認済みだ。今日は、どういうわけか光子の姿が見える猫にもじやまされなかった。

「こういうのも幸先がいいっていいのかね」

光子は男を見下ろした。魔男の魔法を信じているのか、押し入れに隠れる事もなく、ベッドに大の字で寝ている。

「さっきまでは耕太郎のこと信じてなかったくせに。いや、いまでも信じていな

いよ、こいつは。自分の都合の良い解釈を信じているだけだ。バカは死ななきゃ治らないっていうけど、この人の場合はどうだかねえ」

光子は男の顔の上を飛びまわった。光子の体から光の粒が男に降り注ぐ。粒は男の体にすうすうと吸いこまれて行く。最後の一粒がだらしなく開いた男の口に消えたとき、光子の体はもとの半透明に戻っていた。

男は開いた口をもぐもぐさせた拍子に舌をかんだらしく「痛っ!!」と目を開けたが、すぐに眠ってしまった。光子が窓ガラスに溶けるように出て行ったことも目に入らなかった。

∞

ひと月ほど経ったある日。魔男と光子は差し向かいで、遅い朝ご飯をとっていた。相変わらず仕事はなく、ドーナツはとくに底をついた。背に腹は代えられず、最近の米を炊いて食べている。

金に困っているわけではない。魔法使いになったとき、報酬として貰うドーナ

ツだけで生きると願をかけているだけなのだ。

魔男は「米を食べると魔力が落ちる」と言いながら、すでに三杯めだ。

「耕太郎、もう食うな!! 血色がよく肥満体の魔法使いなんて話にならん。仕事
がなくなるぞ」

光子が耕太郎を睨んでいる。

ラジオからニュースが流れている。

今朝、本町三丁目のアパート竹の子荘の部屋が荒らされ、室内に多量の血痕が残
されているのが発見されました。この部屋に住む井上源太郎さん三七歳が会社を
無断欠勤していたため、部屋を訪れた同僚が発見、警察に通報したものです。室
内に井上さんの姿はなく、行方もわかっておりません。井上さんは借金によるト
ラブルを抱えており、最近多額の生命保険に加入させられ、いずれ殺されると怯
えていたと言う話もあり、警察では井上さんの行方を探すとともに、なんらかの

事件に巻き込まれた可能性も視野に入れ捜査を開始しました。

次のニュースで……。

「おい」

光子が茶碗の中を覗いたまま魔男に声をかけた。

「ああ」

魔男は茶碗の底に残った飯一粒を丁寧にと食べると答えた。

ドンドン!!

荒っぽくそれでいて哀れっぽく扉がノックされた。魔男は返事をしない。

「助けてください。まおとこさん、いないんですかあ」

部屋の外には血だらけの男がいた。いつか魔男に人殺しの魔法を頼んだ男だ。

「哀れだな」

「しかたない」

「助けてください。殺される」

血だらけの男は扉にすがりついている。ドアは押しても引いても開かない。それどころか、がたりとも揺るがない。

「耕太郎、ハゲイトウの花言葉はなんだ」

「不老不死」

「考えたな、耕太郎」

「本当はあの男に殺されるはずだった人間に魔法をかけようと思ったが、あの男を見て気が変わった。あの男、借金取りが保険金をあきらめるまで、何度でも殺されるだろう。殺される恐怖を味わえば懲りるんじゃないか」

「甘いぞ、耕太郎」

「そうかな。ま、どうでもいいことだ。どうも人間は腹が減ると意地悪な気分になる」

（完）

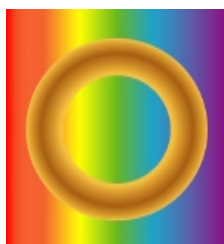
魔男耕太郎 3 色使いの魔法使い

2004年4月22日 初版発行

著者 ぶんろく

発行 Bunroku's Factory

© Bunroku 2004



Bunroku's Factory 魔男
耕太郎3ぶんろく
色 使 い の 魔 法 使 い
